

基礎看護技術教育における「清拭」に関する文献検討

菊 地 由 美*, 門 脇 淳 子*

Review related to basic nursing skill education of the bed bath

Yumi KIKUCHI, Junko KADOWAKI*

抄録

基礎看護技術における「清拭」に関する研究内容を概観し、研究の動向から教育への示唆を得ることを目的に、医学中央雑誌 Web 版にて「看護基礎教育」「清拭」のキーワードで、過去10年、「原著論文」で国内文献の検索を行った。結果、83文献が抽出され、10文献を対象とし、研究目的、対象、内容、課題について一覧表を作成し研究の動向について分析した。「清拭」は複雑で複合的な要素を含み、かつ多様な配慮が必要であるため、学生にとって難易度の高い援助であるが、学内演習で学ぶ清拭は、臨床で行われている清拭と乖離がある。多忙な臨床の中で、時間短縮のために効率性や簡便性を優先せざるを得ない現状は否めないが、患者への配慮である保温やプライバシーへの配慮については、簡略化してはならない教育内容である。明らかにされているエビデンスと慣習で行っている技術について、原理原則に立ち戻って考えることができるような教育が必要である。

キーワード：清拭，基礎看護技術教育，文献検討

Key words : bed bath, basic nursing skill education, review

I. 緒言

「清拭」は、体を拭くことによって清潔を保つ方法であり、入浴やシャワーができない場合に皮膚の汚れを落とす目的で行われるものである。しかし、単に身体の清潔を保つだけでなく、拭く行為によってもたらされるマッサージ効果による血流促進や、爽快感や快適性をもたらすリラックス効果や看護者と対象者の親密なコミュニケーションが生まれるなど、心身に共に良い影響を与えるものである。入浴の習慣を持つ日本人にとって清潔ケアは患者のニーズを満たすうえで重要な意義があるだけでなく、患

者の全身を観察する重要な機会でもある（松村、2014）。また、身体を清潔にすることは人間の基本欲求であり、個人が独立して生活するために行う基本的な身体活動の一つである。「清潔にする」ニーズが満たされなければ、皮膚の機能は低下し、感染や疾病の悪化をまねくばかりでなく、自尊心や美意識の低下によって精神的、社会的にも影響を及ぼすことになる（川口、2013）。

少子高齢化が一層進む中で、患者をはじめとする対象へのケアを中心的に担っている看護職員は、その就業場所も医療機関に限らず在宅や

*駒沢女子大学看護学部

施設等へ広がっており、多様な場において保健・医療・福祉を提供することが期待されており、対象の多様性・複雑性に対応した看護を創造する能力が求められている（厚生労働省，2019）。このような背景を受け、在宅ケアを見据えた看護技術教育の必要性が求められる時代となってきている。加藤木ら（2016）の研究においても、入院期間の短縮は在宅ケアにおいて清拭が求められることにつながるため、看護技術は病院内に限らずどこでも使えることを念頭に置いて考える必要があると述べられている。このような背景から、基礎看護技術教育において、在宅看護を見据えた技術教育が必須となり、日常生活援助に関しても適応幅を拡大した考え方が重要となろう。

現在、学内演習において「清拭」は、最も複雑な手順が求められる“ベッド上臥床患者”を想定し、入院している患者を看護師が全介助する状況設定での技術を中心に実施している。また、臨地実習において「清拭」は学生の多くが経験する技術項目である（藤澤，2019）が、臨床現場で体験する簡易的な清拭と学内で学ぶ原理原則を意識づけた方法で学ぶ清拭との乖離は否めず、学生はギャップを感じ、混乱する要因となっている。

カリキュラム改正を目前に今後の基礎看護技術教育を再構築していく上で、時代のニーズと現状の問題を踏まえ、今後の教育の方向性を検討していく必要があると言える。

「清拭」に関しては、細矢（2010）の過去10年間の研究論文の分析、宍戸ら（2016）の統合的文献レビュー、藤澤ら（2019）の実習における学生の看護技術経験内容に関して文献検討が行われている。しかし、「清拭」に関しての基礎看護技術教育に焦点を当てた文献検討は見当たらなかった。

そこで、今回は看護教育機関を主とした文献

に焦点を当てて文献検討を行うこととした。

Ⅱ. 研究目的

看護基礎教育機関の基礎看護技術における「清拭」に関する研究内容を概観し、研究の動向から教育への示唆を得ることである。

Ⅲ. 研究方法

1. 文献選択

医学中央雑誌 Web 版において、「看護基礎教育」「清拭」のキーワードで、文献の種類を「原著論文」で国内文献の検索を行った。細谷（2010）が過去10年間の清拭に関する論文検討を行っているため、それ以降の約10年（2008～2019年7月）の検索とした。さらに、これらの文献の中で基礎看護技術における清拭の教育内容および授業評価に関する研究、基礎看護技術のテキストの記述内容の分析、清拭の技術に関する実験的研究に関する文献を研究対象とした。

2. 文献検討の方法

抽出された文献は、研究内容を概観するために研究目的、研究対象、研究内容、今後の課題について一覧表を作成し、研究者間で研究の動向について分析した。

Ⅳ. 結果

「看護基礎教育」「清拭」のキーワードで文献検索を行い83文献が抽出され、その中で学内における清拭の授業（講義・演習）に関する10文献を分析の対象とした（表1参照）。これらの文献は、授業後の技術評価に関する研究3文献、演習方法の検討に関する研究4文献、演習内容の検討に関する研究3文献であった。研究対象として除外した73文献の研究内容については、実習に関する文献39件、技術演習に関する文献20件、技術評価に関する文献8件、その他6件であった。

表1 抽出された83文献の研究内容分類

研究内容	文献数	年代別文献数																		
		2019-2016			2015-2012							2011-2008								
		1	2	3	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6			
分析対象 (10)	「清拭」授業後の授業評価	3																		
	演習方法の検討	4																		
	演習内容の検討	3																		
分析対象外 (73)	基礎看護学	10																		
	成人看護学	全般	10																	
		ICU	1																	
		周手術期	1																	
	高齢・在宅	高齢	2																	
		在宅	4																	
	小児・母性	小児	5																	
		母性・助産	2																	
	全般	4																		
	技術演習に関する文献 (20)	基礎看護学	技術評価試験・自己評価	6																
技術への関心			2																	
先輩参加型			2																	
全身清拭の原理・原則			1																	
点滴静脈内注射			1																	
自己練習			1																	
実験			1																	
模擬患者導入			1																	
清拭のイメージ			1																	
性同一性障害のある学生の受け入れ			1																	
成人周手術期演習	1																			
小児学内演習	1																			
演習方法(技術全般)	1																			
技術評価 (8)	卒業時技術到達	卒業時	5																	
		卒業後6ヶ月	1																	
	演習・臨地実習における看護技術経験(成人)		1																	
	OSCE評価者アンケート		1																	
その他 (6)	歴史		2																	
	高齢者を対象とした清拭の文献レビュー		1																	
	臨床でのミニマムリクワイアメント		1																	
	清拭に関する研究内容の分析		1																	
看護技術の実態調査		1																		
		83	18			30							34							

清拭の研究に関する研究の動向は、年代毎に清拭の援助に関する研究数は減少している。基礎看護学に関連する研究の動向においては、

2015年までは臨地実習における清拭の援助に関する研究や技術演習について焦点化された内容などが散見されるが、2016年以降は演習方法・

内容や授業評価に関する幅広い視点で技術演習を捉えている傾向がある。その他の領域においては、人口構造の変化に伴い小児・母性領域での研究数は減少し、在宅・高齢者に関する研究が行われている。

1. 授業後の技術評価に関する研究(表2参照)

1) 教員評価による「清拭」の課題

技術確認および再技術確認での教員評価から清拭の技術習得状況について分析した研究(清水ら, 2018)では、技術確認と再技術確認で習得できていなかった技術として〈拭き残し部位があり効率よく拭いていない〉〈タオルを肌に密着させて平らな面で拭いていない〉〈タオルの絞り方とすすぎ方が適切にできない〉の3項目が挙げられていた。基本的な技術習得の時期には、泡立て方や汲む湯量の適切な方法、湯の調節やタオルの扱い方のコツ、湯温確認の認識を高める支援の必要性が述べられていた。

近藤ら(2019)による清拭の技術確認および再技術確認の教員評価では、「拭き残し部位がなく、効率よく拭いている」、「環境への配慮(危険がなく、物品の置き場所、音、水はねなどに配慮し安全に実施できる)」が課題として挙げられた。

2つの文献から、技術確認を通じた教員評価による清拭の課題としては、石鹸の泡立て方および拭き方や石鹸の拭き取り方などに必要なタオルの扱い方についての技術習得が課題であった。

2) 学生評価による「清拭」の課題

就床患者の全身清拭の技術習得において、学生が抱えている「困難」についての研究(藤尾ら, 2015)では、全身清拭の演習後に学生が演習実施評価表の『自己の課題』に記述した振り返りの記録を分析した結果、【個別性に基づいた計画立案と実施】【日常生活で他者に提供することの少ない技術の実施】【複数行動を実施

するときの対応】【患者を尊重した対応】【目的に合わせた物品配置】【緊張感のある中での実施】の6つのコアカテゴリーが生成された。【個別性に基づいた計画立案と実施】の困難として、[患者の条件に合わせた順序性を考慮した計画立案][計画立案したことを忘れずに適切に実施すること]が記述されていた。【日常生活で他者に提供することの少ない技術の実施】の困難として、[麻痺のある患者や臥床患者に対して人体の構造に基づいた技術を実施すること][状況に合わせながら自分の感覚を使って湯温を調整すること][タオルやせっけんを使って他者の身体を適切に拭くこと]が記述されていた。【複数行動を実施するときの対応】の困難として、複数行動を同時に実施したり、その順序性を考える難しさが記述されていた。【患者を尊重した対応】の困難として、[患者の気持ちやプライバシーを考慮して行動すること(患者の気持ちや負担感、心地よさを考えながら実施すること)][患者が理解できるように説明し承諾を得ること]に困難を抱いていた。【目的に合わせた物品配置】の困難としては、安全および作業領域を考慮した物品配置が難しく、【緊張感のある中での実施】の困難としては、時間内で素早く、無駄なく適切に実施する難しさが記述されていた。

小林ら(2013)による研究によって、学生による技術演習前後の「清拭の技術自己評価シート」から技術習得を困難と感じている項目が明らかにされた。学生の習得度が低い項目は、「作業領域の確保」「湯の管理」などであった。演習後の自己練習で学生は、全身清拭の拭き方の練習が中心となり、物品の配置はあまり重要視していなかった。また、湯の温度を管理しつつ、患者に提供するウォシュクロスを絞るという二重構造の項目は、学生にとって複雑な技術と認知されていた。「全身清拭の拭き方」は、演習

前後ともに平均点を下回る項目が多く、講義と演習後に自己練習を反復し、湯の管理やウォシクロスの絞り方まで習得できる技術指導が必要であると述べられていた。

2つの文献から明らかとなった学生の自己評価による清拭の課題は、清拭に用いる湯温の管理と、湯温の管理をしながらウォシクロスを絞るという複数行動を同時に行わなければならない技術であった。また、学生は物品配置をあまり重要視していないなど、安全および作業領域の確保について指導が必要である。

2. 教育内容の検討に関する研究

1) 演習方法の検討に関する研究 (表3参照)

清拭技術における洗浄剤を固形石鹸から液体石鹸に変更した授業の再構築についての研究(近藤ら, 2019)において、学生は日常的に液体石鹸を使用していたが、69.4%の学生泡立ちやすいナイロンタオルを用いており、フェイスタオルの使用は2%に過ぎず、拭く・泡立てる・すすぐという行為を日常生活の中で2~3割の学生が全く行っていなかった。そのため、学生は「タオルを肌に密着させて平らな面で拭く」ことを、清拭の技術確認後に課題として挙げている。さらに、清拭は、ベースンの湯量と湯温、タオルの温度を一定に保持しながら、寝衣交換を合わせて行う複合的な援助である。そこで、看護技術の基本的な原理原則を習得する段階にある1年次生は、1つ1つの手技の意味と効率性を考えながら技術を統合できるように、タオルの基本的な使い方や拭き方の技術習得を強化する必要性が述べられていた。

城野(2016)による研究において、技術習得の段階によって視聴覚教材(DVD)の活用方法の変化から、看護学生の学習体験の構造について明らかにされた。学生は、練習前の段階において全身清拭の全体の流れや手順を確認し全体像を把握することを目的に視聴覚教材を活用

していた。その後、全身清拭の一連の実践が可能になった技術習得の段階では、視聴覚教材を活用する目的は実践内容の自己評価・修正であった。そこには、練習前の全体像把握で生じた疑問を確認するために、焦点化した視聴覚教材の使用によってポイントを絞った疑問の解決に繋がり、視聴覚教材を反復使用することで情報処理能力が高まりイメージ化が促進されていたと述べられている。学生はこのプロセスの中で「よりよい方法の思案」「対象の状態・状況に応じた応用の思案」する学習の発展や、知識・技術の新たな気づきが生まれ、学生自身が思考することで知識が定着する学習体験の構造が明らかにされている。

石川(2015)の研究において、学内演習で学生が学んでいる全身清拭の知識項目と臨床で行われている全身清拭の相違、学内演習で使用しているテキストに記されている実施方法と臨床で行われている全身清拭の手順の相違が明らかにされた。知識に関しては、相違が7項目あり「露出を最小にする」「プライバシーのためバスタオルで覆う」という項目が知識としては重要とされながらも臨床では実施されていなかった。臨床での全身清拭と学内演習で使用しているテキストに記されている手順に関する相違は4項目あり、臨床では「使用物品」「予洗い」「覆いをかけて露出を最小限」「乾布で拭き取り」が実施されていなかった。全身清拭の所要時間については、臨床看護師とともに著者が実施した清拭は10分間、演習では50分間の設定であった。演習の時間設定は、身体を拭くということに加えて、作業環境を整え、患者の露出を少なくするための動線や最小の負担で行う体位変換など複合した技術を学ぶ時間であり、患者体験により疲労感や心地よさ、不快、羞恥心など知識だけでなく実感して学ぶ重要な時間である。

岡本ら(2012)による看護技術教育に実験を

導入した効果についての研究では、洗浄剤の違いが皮膚に与える影響を数値として具体的に観察したことで、皮膚表面のpHを弱酸性に保つための洗浄剤の選択と、水分が不足している場合の洗浄剤の選択について学生全員が正しく理解することができていた。また授業評価を目的に行ったアンケートの結果、【患者個々の状態に適した洗浄剤・洗浄具を選択することができる】【実験を導入することにより学習の理解を深めることができる】と実験を導入した授業を評価していた。実験を導入した看護技術教育は知識の提供に留まらず、学生が理解した原理や根拠を応用して論理的思考から対象の個性に配慮した使用物品を選択し、皮膚の統合性を適応状態に保つための看護介入の実施に繋がっていた。

4つの文献による演習方法の検討から、看護技術の基本的な原理原則を習得する段階にある学生が、複合した技術である清拭の援助の技術を習得するためには、1つ1つの手技の意味と効率性を考えながら技術を統合できるような指導が必要であると考え。その上で、学習した知識が定着するためには、学生自身がより良い方法や対象の状態に応じた応用を思案したり、実験を通して原理や根拠を応用した援助を考えることで学習が発展するなど、知識・技術の新たな気づきが生まれるような演習方法の検討が必要である。また、学内での演習は単に身体を拭くだけでなく、学生は患者体験により、清拭による疲労感や心地よさ、不快、羞恥心などを知識だけでなく実感を通して学ぶことが重要である。

2) 演習内容の検討に関する研究 (表4参照)

中川ら(2016)による研究において、4年制看護系大学における基礎看護学領域の教授・准教授が、全身清拭を実施するために最低限必要と考える知識項目について調査を行った。その

結果、最低限必要と考える知識として51%以上の同意の得られた項目は、139項目中102項目であった。その中で28項目が80%以上の高い同意の得られた項目であり、〈清拭援助の全身への効果〉〈清潔援助の方法の選択を判断するための観察の視点(全身状態、皮膚・粘膜の状態、セルフケア能力、日常の清潔習慣)〉〈入浴動作に伴う循環器・呼吸器への影響〉〈全身清拭の目的〉〈全身清拭の手順(患者への説明と同意、バイタルサイン測定など)〉〈全身清拭実施時の留意点(熱傷防止、皮膚・全身状態の観察など)〉のであった。低い同意率(51~69%)となった知識項目は50項目と一番多く、〈皮膚・粘膜の構造〉、〈皮膚・粘膜の機能〉、〈入浴禁忌の条件〉、〈清潔援助方法の選択を判断するための観察の視点(治療内容・既往歴・精神的要因・年齢・性別)〉、〈全身清拭の手順(身だしなみを整える、患者をねぎらうなど)〉、〈全身清拭実施時の留意点(適切な洗浄剤や沐浴剤を選択し使用する)〉であった。これらの低い同意率の知識項目には患者理解につながる知識項目を含んでおり、基礎看護学領域の教授・准教授らは、学内における机上での学習を臨床実習に結び付けるために必要な知識項目であると考えているが、原則に沿った基本的な知識項目をより重要な知識項目として考えていた。

川口(2010)らの研究によると、基礎看護技術のテキスト7誌の「全身清拭」に関する記述は20項目に整理され、いずれにも記述されていたのは「プライバシーの保護」「準備物品」「拭く順序」「拭き方」「掛け物・水分の拭き取り・保温」「陰部清拭」の6項目であった。看護基本技術を支える態度や行為の構成要素の8要素のうち、「知識と判断」「実施と評価」「プライバシーの保護」「対象者への説明」「安全・安楽確保」の5要素に関連する記述が多かった。「指示確認・報告・記録」「個別性への応用」「家族

相談・助言」の3要素に関しては記述が少なかつた。

馬醫ら(2008)の研究によると、基礎看護技術のテキストでは「石けん+ウォッシュクロス+お湯」を用いた清拭が日米のテキスト全てに記載されており、スタンダードな教育内容であると考えられたが、臨床では「温タオル」を用いた清拭が普及していた。清拭の方法について、バケツに準備する湯の温度は54～60℃、ベースンのお湯の温度は実施者の手を入れられる最高温度(50～52℃)、皮膚にあたる洗布の温度は40～45℃という記載が多かつた。プライバシーの保護について、全ての教科書で清拭部位以外は綿毛布とバスタオルで覆う」と記載されていたが、臨地実習に出た学生からは「綿毛布もバスタオルも使われておらず覆われていなかった」という言葉も聞かれ、清拭に対する患者満足度の中で重視する項目としてプライバシー保護が挙げられているため、臨床の実態を踏まえた教育内容の検討を行う必要があると述べられている。

基礎看護技術のテキストには、看護基本技術を支える態度や行為の5つの構成要素「知識と判断」「実施と評価」「プライバシーの保護」「対象者への説明」「安全・安楽確保」に関連する記述が多く、基礎看護技術を教授する教員も、全身清拭を実施するために最低限必要と考える知識項目として、全身清拭の手順としては、説明と同意・バイタルサイン測定を行い状態を判断する・患者に所要時間と方法を説明する・物品を適切に配置する・排泄の有無の確認すること、実施時の留意点としては熱傷させない・皮膚と全身状態の観察を行う・声掛けを行う・患者ができる所は自分で拭いてもらう・過度の疲労を与えない・露出を最小限にすることが考えられていた。しかし、臨床においては、清拭の患者満足度の中で重視されるプライバシー保護

は実施されていない現状が明らかにされていた。

V. 考察

本研究で分析対象とした10文献は、学生の自己評価及び教員評価から技術の習得状況の評価し、今後の課題を明らかにしたもの(技術評価に関する研究)、視聴覚教材の活用法や洗浄剤の検討、臨床技術との比較、実験の導入等(演習方法の検討に関する研究)、テキストの記述内容の比較(演習内容の検討に関する研究)等であった。これらの文献から、過去10年間(2008～2019年7月)の期間における「清拭」の看護技術教育に関する研究からみえる現状と今後の課題について考察する。

1. 「清拭」の看護技術教育における現状

今回分析対象とした、学生による技術演習前後の「清拭の技術自己評価シート」から困難としている項目を明らかにし教育の要点を見出した研究(小林ら、2013)や、清拭技術における洗浄剤を固形石鹼から液体石鹼に変更した授業の再構築についての研究(近藤ら、2019)で、困難な項目として挙げられている内容をみると、「清拭」がいかにか複雑で複合的な要素を含み、かつ多様な配慮が必要な援助であるため、学生にとって非常に難易度の高い援助であるかということがわかる。例えば、「湯温の管理をしながら、適度な水分量のタオルを絞り、最小限の露出で保温に配慮しながら、部位に応じた拭き方で拭く」といったことである。基本的な技術としては、湯の管理、タオルの扱い方、洗浄剤の扱い方に関しては、清潔援助に共通する手技であるため実施できるレベルでの習得を目指したいと考える。また、保温やプライバシー保護といった対象に応じた配慮や、看護師の動線や作業領域の確保に関連する物品配置については、必要性の理解までは出来たとしても、それらを基本的な技術と合わせて実施することは、2年

次までの基礎看護技術の学習として習得することは難しく、臨地実習での経験や他領域での継続的な学習へと繋ぎ、支援していくことが望まれる。

また、自立のかつ継続的な学習支援のためには、学習環境の整備や工夫が必要である。分析対象の研究においても、学生が抱えている「困難」についての研究（藤尾ら，2015）や技術確認および再技術確認での教員評価から技術習得状況について分析した研究（清水ら，2018）は、学習プロセスで出てくる困難ごとや未習得の事柄を明らかにし、今後の教育に役立てることを目的に行われた研究である。これらは繰り返し研究されているテーマであり、基礎看護技術教育においてはいつの時代にも課題となる内容であることが考えられた。技術を身につけるに当たっては、単に手順書通りの真似事ではなく、原理原則と根拠を理解した上で、様々なことに配慮しながら実践する技術を習得するためには、技術練習と知識・技術の確認をくり返しながらか積み上げていくプロセスが必要である。何が出来て、何が出来ないか、ということを手際よく振り返り、出来ることを増やしていくといった地道な継続的努力が必要である。これらを学生に指導していくことは、この学習時期ならではの教育の基本ともいえるのではないだろうか。

看護基礎教育検討会報告書（厚生労働省，2019）に、「近年、若い世代においては、住環境の変化や科学技術の進歩等により、これまでに比べ人間関係の希薄化や生活体験の不足が進んでいる。看護職員として働くためには、対象の多様なスタイルや文化等を理解することが求められる」とある。時代と共に少しずつ学生の日常における生活体験が変化し、看護の対象となる高齢者との常識範囲の共有が難しくなっていることが否めない。そういった意味でも、学生自身の清潔習慣の実際理解（近藤ら，

2019）も必要であり、学生の理解を促進するために視聴覚教材の活用（城野，2016）や実験を取り入れた授業（岡本ら，2012）などを活用し、体感的に学ぶような教育方法の工夫も必要であろう。

演習内容の検討に関する研究において、複数のテキストの記述内容を分析した研究（中川ら，2016、川口ら，2010、馬髻ら，2008）は、本論文と類似した過去10年間の「清拭」に関する研究内容を分析した先行研究（細矢，2010）には含まれていなかった内容であり、この10年間の動向の特徴であると言える。これらのことから、時代とともに変化する学生に対して、教授すべき内容を吟味していく上で必要な研究であり、必要なテキストを精選していく情報ともなり得る。

2. 看護技術教育における今後の課題

石川（2015）の研究において、学内演習で学生が学んでいる全身清拭の知識項目と臨床で行われている全身清拭の相違、学内演習で使用しているテキストに記されている実施方法と臨床で行われている全身清拭の手順の相違が明らかにされた。三輪木（2004）の研究において、臨床では「タオルの扱い方」、「清拭後の水分のふき取り・乾かす」、「バスタオルを用いて不必要な露出を避け、保温する」に注意が払われていなかったという報告がある。石川（2015）においても、臨床では「使用物品」「予洗い」「覆いをかけて露出を最小限」「乾布で拭き取り」が実施されていなかったといった報告がある。臨床現場では、いつの時代も時間短縮のために、同様な技術の簡略化が行われており、それは看護師自身も自覚しているが、一向に改善されていないことが示唆される。多忙な臨床の中では、時間短縮のために効率性を優先した援助が行われているとあるが、患者へのプライバシーや保温への配慮に関して援助を省略してはならない

と考える。学生が学習した原理原則が、臨床での経験によって安易に情報が上塗りされて変容していく可能性が危惧される。したがって、学生は常に原理原則に立ち戻り、大切にすべきことを考え直すことができるよう繰り返し学習することが必要である。

松村ら(2014)の看護師が行う清潔ケアに対する入院患者の認識に関する研究において、「看護師から清潔ケアを受けている患者は、きめ細やかな清潔ケアを受けることや適切な時間と方法で提供してくれることに満足感を得ていた。しかし粗雑なケアに対しては不満を抱いていた」という結果からも、患者への気配りや配慮ある援助は絶対条件である。

近年、フェイスタオルやウォッシュクロスに替えてディスプレイタオルを取り入れている病院もあり、石鹼清拭と同様に快適感や爽快感を得られること、綿タオルよりも清浄度が高く、効率が良いことが報告されている。一方では皮膚表面温度が低下するという問題点が指摘され、綿タオルの保湿性の方が優れているという報告もある(宍戸, 2016)。臨床で行われている実態を把握しつつ、明らかになっているエビデンスと慣習として行っていることを明確にし、時間短縮のための安易な簡略化にならないようにしていく必要がある。臨床現場との乖離については、教員はその内容を把握した上で教育が必要であり、学生が感じるギャップに対しては、その都度、原理原則に立ち戻って考えさせることで、繰り返し意識させる教育が必要であろう。

VI. 結論

1. 「清拭」は複雑で複合的な要素を含み、かつ多様な配慮が必要であるため、学生にとって非常に難易度の高い援助であるが、清潔援助に共通する湯の管理、タオルと洗

浄剤の扱いは、基本的な技術として習得を目指す手技である。

2. 学生の日常における生活体験の変化に合わせて、視聴覚教材の活用や実験を取り入れた授業によって、体感的に学ぶような教育方法の工夫が必要である。
3. 学生が学内演習で学んでいる清拭に関する知識項目とテキストに記されている手順は、臨床で行われている清拭と乖離がある。そこには、多忙な臨床の中で、時間短縮のために効率性や簡便性を優先せざるを得ない現状は否めないが、患者への配慮である保温やプライバシーへの配慮については、簡略化してはならない教育内容である。
4. 臨床現場との乖離については、学生が感じるギャップなどの内容を把握した上で、明らかにされているエビデンスと慣習で行っている技術について、原理原則に立ち戻って考えることができるような教育が必要である。

VII. 本研究の限界と課題

今回は、「清拭」に関しての基礎看護技術教育に焦点を当て、看護教育機関を主として原著論文に限定して文献検討したため、分析対象が10論文と少なかった。したがって、過去10年の動向を把握する限界があった。今後は、他の看護学領域の授業や臨地実習での学び等の文献の分析も含め、卒業時までの学習の積み上げや発展についても検討し、病院のみならず在宅も含めた看護の場や対象を見据えた適応幅の広い技術の教授について考えていく必要がある。更に、検討の範囲と立場を拡大し、「清拭」が教育的視点のみならず、様々な場所で働く看護師の視点や看護を受ける患者・家族の視点などからも調査し、多角的に「清拭」という技術について探究していきたい。

表2 授業後の技術評価に関する研究

文献	発行年次	研究目的	研究方法	対象と学習時期	内容	今後の課題
清拭の技術習得のための段階的な支援。振り返り用紙と技術評価表からの検討 (清水ら)	2018	学生の清拭の技術力が短期間で向上した。要因を分析し、段階的な支援の方向性を検討する。	清拭技術の振り返り用紙と技術確認・再技術確認の評価表の2つの集計結果を分析	左記より 学習時期：不明	到達度別および技術確認、再技術確認での違いを比較した。技術確認での到達率は13.4%、20分以内の上半身清拭を実施出来た学生は61%、習得不十分な技術は拭き残し部位があり効率がよく扱っていない(タオルを即座に密着させて平らな面で拭いていない)であった。再技術確認での到達率60.2%、20分以内に出来た学生は54.3%、習得不十分な技術は拭き残し部位があり効率がよく扱っていない(タオルの裏の方とすずき方が適切にできない)であった。技術確認前に20分以内に実施可能かどうか学習率に影響している。	練習初期に20分以内での実施を目標に練習を促し、受検要件の練習回数(20分以内で実施可能な練習回数)11.2回を目安に自身で実施する。基本的な技術習得の時期には、辺り方や進む湯量の適切な方法、湯の調節やタオルの扱い方のコツ、湯温確認の認識を高める支援が必要であり、技術を確く時期へ移行する段階では、学生個々の課題を明確にする支援の必要性、集中的な練習環境の調整の必要がある。
A文学看護学部の学生が技術習得において抱えている「困難」。一時的導尿と就床患者の全身清拭に焦点をあてて (藤尾ら)	2015	一時的導尿と全身清拭の技術習得において学生の抱えている「困難」の内容と共通性・差異を明らかにする。	導尿と全身清拭の演習後に学生が演習実施評価表の『自己の課題』に記述した振り返りの記録を分析した質的記述的デザイン	基礎看護技術に関する科目の単位を修得しており研究参加に同意が得られた学生167名。 学習段階：2年生(11~3月)	全身清拭の演習実施評価表を分析した結果、33サブカテゴリ、13カテゴリ、6つのコアカテゴリが生成された。コアカテゴリには、「個別性に基づいた計画立案と実施」「日常生活で他者に提供する際の少ない技術の実施」「複数行動を実施するときの対応」【患者を尊重した対応】【目的に合わせて合わせた】【実施】の6コアカテゴリが生成された。	便利な生活用品の普及と生活用品の電子化により、身体機能を使わずに必要な動作のできる生活を求めているなかで、身体機能を使うような看護技術を他者に提供することが難しくなっており、学生に提供するという経験を重ねていくことが課題である。
看護学生の全身清拭の技術習得過程における指導強化項目の1考察 (小林ら)	2013	全身清拭の技術習得項目で学生が困難としている項目を明らかにし、技術教育の要点を見い出す。	「清拭の技術自己評価シート」による技術習得理解度の調査	43名の全身清拭の演習時の『技術自己評価シート』(全19項目)学習段階：1年生(7~10月)	「作業領域の確保」や「湯の管理」など、学生が自己を振り返りつつ学修する中で講義の内容を可視化することで、理解度を促進した。教員が演習後も学生の自己練習を指導したり、練習場面を観察したこと、実技を伴った基礎看護技術の習得には反復練習の必要性に気づき、行動が変化した。 演習後の自己練習では、全身清拭の拭き方の練習が中心となり、物品の配置はあまり重要視していなかった。 湯の温度を管理しつつ、患者に提供するウォッシュクロスを絞るという二重構造の項目は、学生にとって複雑な技術と認識されている。 「全身清拭の拭き方」は、演習前後ともに平均点を下回る項目が多く、講義と演習後に自己練習を反復し、湯の管理やウォッシュクロスの絞り方まで習得できる技術指導が必要である。	「作業領域の確保」や「湯の管理」など、学生の習得度が低い項目を把握し、講義・演習・反復練習を促し、学生の行動変容に繋がる指導を行う必要がある。

表3 演習方法の検討に関する研究

文献	発行年次	研究目的	研究方法	対象と学習時期	内容	今後の課題
清拭技術における固形石鹸から液体石鹸への洗浄剤変更に伴う授業の再構築 (近藤ら)	2019	清拭技術における固形石鹸から液体石鹸への変更に伴う授業の再構築について考察する。	記述内容は質的分析、数値データは単純集計	1年次学生 99名 (学年・看護学領域内における検討内容及び学生への指導内容、評価に関する授業、講義、演習の授業の配布資料等) 学習時期: 7~12月	方法を更にするにあたり、臨床の現状と文献の記述を確認したうえで、学生のレディネスを把握するために自身の入浴習慣を調査し、液体石鹸を用いた清拭技術の教材研究、学生の技術習得状況を把握する到達目標の見直しを行った。これらにより、円滑な導入・学習効果につながる。	日常生活体験の少ない学生の現状から学生の基本的な使い方と共に清拭の主目的を果たす拭き方の技術習得を強化する必要性がある。また、清拭技術は、薬交換を合わせて行う複合的な援助であるため、一つ一つ統合できるような指導することが必要である。今後は学内授業の効果を検証するために実習における清拭技術の経験の実態を明らかにしたい。
「清潔・衣生活」の看護技術習得に向け、視覚教材を活用した看護学生の学習体験 (城野ら)	2016	「清潔・衣生活」の看護技術習得に向け、視覚教材を活用した看護学生の学習体験を明らかにする。	質的構造的な研究(半構成的面接)	9の看護専門学校3年課程の22年生10名 学習時期: 5~6月	9のカテゴリーが抽出された。看護学生は技術習得にあたり【全体像の把握】[復使用]【無点化した使用】をしながら視覚教材を活用【知識・技術の再確認】を行っている。学習が進む中で【活用方法の変化】が生じ、イメージ化が促進し、その結果【学習】や【知識・技術】の新たな気づきが生まれ、自ら思考することによって定着している。同じ視覚教材を複数の者でかつ能動的に活用することで思考する機会となり、自己評価にもなっている。これらは、他の看護技術にも共通する体験であると推察される。	視覚教材学習の方向性を明らかにしていくこと、個々の学習体験の違いや特徴について分析を深めること
基礎看護技術教育における「全身清拭」の演習方法に関する検討 (石川)	2015	臨床で実践されている「全身清拭」に相違しているかのような現状を明らかにし、今後の学内演習内容や進め方について検討する。	参加観察(3ヶ月間の出向での経験)	分析対象数等不明	学内演習と臨床での清拭手順の比較(知識、テキスト、時間)を行った。知識に関しては、相違が7項目あり露出を最小にする「プライバシー」のためハスタオルで覆うという項目が知識としては重要とされながらも臨床ではか美触されていないかった。手順に関しては、「使用物品」「手洗いの履きかき」を最小限「乾布」で拭き取り」と相違は4項目であった。時間は臨床では10分、演習では50分間の設定である。演習の時間設定は、身体を拭くということに加えて、作業準備を整え、患者の露出を少なくするための動線や最小の負担で行う体位変換など複合した技術を学ぶ時間であり、患者体験により疲労感や心地よさ、不快、羞恥心など知識だけでは深く実感して学ぶ重要な時間である。湯を使うか否か、時間短縮のためにティスポン・ザールのタオルの個別性を用いるのは現実的な方法ではあるが、温度変化の影響や対象の個別性に合わせたタオル素材の選択という機会が必要である。	学生のうちから体の観察をするために十分ながかつ最小限の露出にとどめて清拭を実施する技術を身につけるよう教育していく必要がある。 全身清拭を必要とすると患者に対しては、洗浄剤を乗せる前に肌を濡らさなければならないという行為や清拭後の酸化熱を防ぐ着替えは大きいものではないかと考えるため、忙しさを理由に簡略化してはならない手順であり、それを簡略化するのは患者に不利益を与えない行為である。と学生に浸透する大切さや面白さがある。技術を習得する大切さや面白さの体験が十分にできていない結果、練習よとする意欲を喚起できていないという現状を再認識する必要がある。
実験を導入した看護技術教育の「皮膚防衛」の統合性」の授業を通して (岡本ら)	2012	「足浴」「清拭」「洗髪」の看護技術の種類について、実験を通してpH・水分量・洗浄力の相違を理解させ、個別性に配慮した洗浄剤の選択ができるような看護技術教育を実施したその効果を明らかにする。	実験研究	基礎看護技術Ⅰを受講した看護学科1年生78名 学習時期: 11月	pHを弱酸性に保つ【水分が不足している場合】の洗浄剤選択は、実験を通じてスキッチャップメーターやモイスチャー・センサーを使用し、その結果を図表化したことで皮膚に与える影響を数値として具体的に観察し、その結果を図表化したことで論理的思考から対象の個別性に配慮して使用物品を選択し、皮膚の統合性を適切に保つための看護介入を実施できた。しかし、【汚れが強い場合】には紙上事例の皮膚状態を考慮して方法を選定し加えなければならないため、高齢者の皮膚状態をイメージできない学生が皮脂分泌量や活動の程度を鑑みて軟弱化した皮膚の汚れに対する洗浄剤を選択することは容易ではない。	実験を導入した看護技術教育は、学生の興味・関心をひきつけ看護技術の科学的根拠を理解させる効果があるが、実験で得られた科学的根拠をより現実的に理解させるためには、模擬患者参加型の授業を導入する等の工夫によって、模擬患者による適切な反応によって学び得た看護技術教育は、臨床現場に対応できるための知識や技術の基盤を形成し、看護実践能力を高める効果をもたらすのではないかと。

表 4 演習内容の検討に関する研究

文献	発行 年次	研究目的	研究方法	対象	内容	今後の課題
教育現場が求める全身清拭の知識に関するミニマムリクワイアメントについてのデルファイ法による調査研究 (中川ら)	2016	全身清拭を実施するために重要であり、必ず身につけるべき知識を明らかにすること。	第1～3回質問紙調査を行い、デルファイ法を用いた量的記述的研究	4年制の看護系大学における基礎看護学領域の教授・准教授 58名	対象者58名(1回目質問紙49名回収、2回目質問紙49名回収、3回目質問紙39名回収) 基礎看護技術に関する教科書(冊)の中で「全身清拭」の記載部分について188項目を抽出し、その中で102項目について5%以上の同意率であり、看護教育の原則に従い基本的知識項目を重要な知識項目と考えた。また、これらの知識項目は看護基礎教育に反映している。 また、臨床の現状を踏まえ看護基礎教育に反映している。 高い同意率の知識項目は、〈清拭援助の全身への効果〉〈清潔援助の方法の選択を判断するための観察の視点(全身状態・皮膚・粘膜の状態)〉〈セルフケア能力、日常の清潔習慣〉〈入浴動作に伴う循環器・呼吸器への影響〉〈全身清拭の目的〉〈全身清拭の手順(説明と同意・バイタルサイン測定を行い状態を判断する・患者に所要時間と方法を説明する・物品を適切に配置する・排泄の有無の確認)〉〈全身清拭実施時の留意点(熱傷させない)〉〈皮膚と全身状態の観察を行う・声掛けを行う・患者ができる所は自分で拭いてもらう・過度の疲労を与えない・露出を最小限にする)〉であった。	重要であると考えた知識項目は、基本的な知識項目であり、繰り返し教育することで知識が定着し、学生が重要性を認識できる。
「全身清拭」の教育内容の検討。全身清拭に関する基礎看護技術テキストの内容から (川口ら)	2010	「看護基本技術を支える態度や行為の構成要素」に関するテキスト中の「全身清拭」の記述内容を明らかにし、今後の基礎看護技術の教育内容に示唆を得る。	文献検討	2003年以降発行の基礎看護技術テキスト7誌	テキスト7誌の「全身清拭」に関する記述は20項目に整理され、いずれにも記述されていたのは「プライバシー」の保護、「準備物品」「拭く順序」「拭き方」「掛け物・水分の拭き取り」「保溫」「陰部清拭」の6項目であった。構成要素8要素のうち、「知識と判断」「実施」「プライバシーの保護」「対象者への説明」「安全・安楽確保」の5要素に関連する記述が多かった。「指示確認・報告・記録」「個別性への応用」「家族相談・助言」の3要素に関しては記述が少なく、共通した見解を見出すことができない。	記述の少ない3要素については、補足説明、ディスプレイセッション、臨地実習や専門分野科目等での学びの深まりが必要。
学内における基礎看護技術演習についての一考察。教科書比較による全身清拭の検討 (馬淵ら)	2008	基礎看護技術の教育内容を見直したため、教科書を対象に内容を比較し資料を得る。	文献検討	・日本の教科書5件と米国の教科書2件 ・医学中央雑誌で2003年～2007年の全身清拭についての文献	教科書では「石けん・オゾン・アルコール」を用いた清拭が普及していた。であったが、臨床では「湯タオル」を用いた清拭が普及していた。	石けん清拭は慣れた看護師でも実施に時間を要し、効率的な良い方法が模索されている。どの程度の割合で臨床現場で石けん清拭を行っているのか、時間をかけてでも石けん清拭を行う事が本当に患者にとって効果的であるのか、お湯のみの清拭と石けん清拭にかかる時間の差はどの程度のものなのか調査し、学生の教育内容を検討することが必要である。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

引用文献

馬醫 世志子, 佐藤 晶子, 城生 弘美 (2008) :
学内における基礎看護技術演習についての
一考察 教科書比較による全身清拭の検討,
群馬パース大学紀要, 6, 65-70.

藤澤 望, 高橋 有里 (2019) : 基礎看護学実習
において学生が経験している看護技術内容
- 過去10年間の文献検討より -, 岩手県立
大学看護学部紀要, 21, 9-18.

藤尾 麻衣子, 藤谷 章恵, 鈴木 聖子 (2015) :
A 大学看護学部の学生が技術習得におい
て抱えている「困難」 一時的導尿と就床
患者の全身清拭に焦点をあてて, 武蔵野大
学看護学研究所紀要, 9, 19-28.

細矢 智子 (2010) : 清拭に関する研究内容の分
析 過去10年間の研究論文を通して, 医療
保健学研究, 1, 55-65.

石川 美智子 (2015) : 基礎看護技術教育におけ
る「全身清拭」の演習方法に関する検討,
獨協医科大学看護学部紀要, 8, 89-97.

城野 美幸 (2016) : 「清潔・衣生活」の看護技
術習得に向け, 視聴覚教材を活用した看護
学生の学習体験, 日本看護学教育学会誌,
25 (3), 37-46.

加藤木 真史, 菱沼 典子, 佐居 由美 (2016) :
看護技術の実態調査 清潔ケア、感染予防、
周術期ケアに関する分析, 日本看護技術学
会誌, 15巻 (2), 146-153.

川口 賀津子, 須崎 しのぶ, 山下 千波 (2010) :
「全身清拭」の教育内容の検討 全身清拭
に関する基礎看護技術テキストの記述内容
から, 日本看護学会論文集 : 看護教育, 40,
203-205.

川口 孝康 (2013) : 看護援助の基礎のキソ (第

1 版), 109-118, 医学書院.

小林 理絵, 関谷 まり (2013) : 看護学生の全
身清拭の技術習得過程における指導強化項
目の1 考察, 愛仁会医学研究誌, 44, 233-
235.

近藤 奈緒子, 由井 志穂, 池田 博子 (2019) :
清拭技術における固形石鹸から液体石鹸へ
の洗浄剤変更に伴う授業の再構築, 神奈川
県立よこはま看護専門学校紀要, 11, 1-7.

厚生労働省 (2019) : 看護基礎教育検討会報告
書 (案), https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_06996.html (検索日 : 2019.10.3)

松村 千鶴, 深井喜代子 (2014) : 看護師が行う
清潔ケアに対する入院患者の認識, 日本看
護技術学会誌, 12 (3), 58-63.

三輪木 君子 (2004) : 臨床における「清拭」援
助の実態と看護師の認識, 静岡県立大学短
期大学部 平成16年度教員特別研究報告書,
1-19.

中川 名帆子, 山内 豊明 (2016) : 教育現場が
求める全身清拭の知識に関するミニマムリ
クワイアメントについてのデルファイ法に
よる調査研究, ヒューマンケア研究学会誌,
7 (2), 1-9.

岡本 千尋, 滝内 隆子 (2012) : 実験を導入し
た看護技術教育の効果 防衛の「皮膚の統
合性」の授業を通して : 岐阜看護研究会誌,
4, 121-127.

清水 小織, 由井 志穂, 乾 久枝 (2018) : 清拭
の技術習得のための段階的な支援 振り返
り用紙と技術評価表からの検討, 神奈川県
立よこはま看護専門学校紀要, 10, 5-10.

宍戸 穂, 矢野 理香 (2016) : 「清拭」の統合的
文献レビュー, 日本看護技術学会誌, 15 (2),
52-62.

